

ワインから苦い薬草へ
— 「教授の家」 試論 その 1 —

田 江 安 廣*

(2009年10月27日 受理)

TAE Yasuhiro

From the House of Wine to the House of Bitter Herbs:

Removal of St. Peter in *The Professor's House*

Janis Stout, a Cather scholar refers to *The Professor's House* (1925) as one of “dark trio” that Cather produced in 1920's. Stout finds in these works “brokenness” and “disjuncture” which characterize an important aspect of modernity. The present essay, while indebted to many Cather scholars, aims to clarify what will follow under the influence of philosophers including Heidegger, Derrida and Bachelard, geographers, Yi-Fu Tuan and Edward Relph, and a specialist of myth and religion, Mircea Eliade: my aim is, first, to trace the causes that brought about rift and discontinuity in Cather's works and compare *A Lost Lady* and *The Professor's House* in terms of theme, tone and representation of places and characters; second, to analyze, by employing Derrida's view of mourning and memorization of the dead, a mode by which characters in the novel memorize and possess Tom; third, by making use of Heidegger's view of death, to explore the nature of acceptance of death that St. Peter achieves after a suicidal accident. I discuss how the unconscious helps the protagonist to get ready to move from “the house of wine” (Tom and the aesthetic world) to “the house of bitter herbs” (Augusta and the house of ultimate possibility that embraces death); fourth, to discuss the significance of Peter's childhood reverie with special reference to Bachelard's *La Poetique de la Reverie* and *La Poetique de L'Espace*; fifth, to clarify the crucial importance of place in the novel with the help of insightful phenomenological approach to place and space made by the geographers, Tuan and Relph.

Key words:

Trauma and Memory, Disjuncture, Loss and Melancholy, Permanence and Change, Disillusion and Betrayal, Money and Possession, Preparation for Death, Reverie and Childhood, Place and Placelessness, Holy and Profane, Mobility and Settlement

* 鹿児島大学教育学部 教授

最後に、もっとも陰しく、もっとも粗末な屋根裏部屋の階段を我々はいつものぼってゆく。それにはもっとも静かな孤独への上昇のしるしがある。

ガストン・バシュラール

人間を場所から切り離して理解することは出来ない。人間は場所なのである。

ガブリエル・マルセル

親密な空間は大げさに着飾ってはいない。

イーファー・トゥアン

なぜならば我々は我々の存在しないところに存在するからだ。

ピエル＝ジャンジュエヴ

生はただ大地の胎内を離れることであり、死はその家に還ることである。

ミルチャ・エリアーデ

キャザーの初期から後期までの作品はどのように特徴づけられるであろうか。ジャンヌ・スタウトは明→暗→静というスキームを批判的に提示する。「青春の輝き」、不屈で、前進する精神を特徴とするのが初期作品であり「私のアントニア」(1913)や「おお、開拓者よ」(1918)がこの期に属する。しかし中期の作品は失意と幻滅が作品のトーンを支配し、色調は暗く、重い。いわゆる「中年期の失意の沼」である。「迷える夫人」(1923)、「教授の家」(1925)、「わが終生の敵」(1926)が中期の作品群である。後期作品の主たる特徴は静謐、宗教性といえよう。「大司教に死は来たる」(1927)、「岩の上の影」(1931)、がこの時期の作品にあたる。¹

スタウトが批判をまじえて提示したシェーマを筆者なりに敷衍したものは上記のとおりであるが、スタウト自身気づいているように、この図式は流動性、異種混交性、非決定性、不可能性への逗留を重視する現代においては明快にすぎ、例外を考慮していない。作品の特権的内容を「異種混交的テキスト」あるいは「分裂症的テキスト」と見なし、決定不可能性を志向する今日的見方からすれば、支柱にではなく、隙間や襞、周縁や沈黙部、対立や矛盾にこそ重要性が存在するとされるのである。²

スーザン・ソントグは優れた芸術は人を不安にするとする。現実には化粧であり、文化は自然と死からの壮大な逃避装置かもしれない。シクロフスキーは日常的なものを非日常化することとして小説の営みを理解し、フロイトは抑圧を受けた結果、見慣れたものが見慣れぬものに姿を変形して姿を現したものを「不気味なもの」と定義した。作品に隙間や襞、沈黙部、矛盾が存在することは、全体にではなく部分に、語りえぬものにこそ鍵が隠れ、表現されたものと表現し得ぬも

のについての埋めがたい落差に作品の真証性を証す痕跡が存在しているのだとも考えられるのである。³

しかしながら、批評行為が経験を読者から引き離し、理論にのめりこみ、ほとんど形而上学なものに変貌してしまったという「故国喪失についての省察」におけるサイドの指摘も忘れてはならない。歴史とは時間の推移、過程であるというより、権威の言語の出現によってはじめて可能となる出来事性であるというのがド・マンの歴史理解であるが、ここでは歴史をテキスト化するのではなく、テキストを歴史化することも念頭におきつつ、作者の人生の分岐点に着目し、ある出来事（トラウマの体験）に象徴的意味を見出し、作品にアプローチする方法は、シャロン・オブライエンも試みたように、それなりのおおまかな「道しるべ」となるかもしれない。⁴

まず初期から中期に見られる大きな作風の変化の原因を諸家の研究を参考にしつつ、探求する。後にも述べるが、キャザー研究はレオン・エデルに始まる精神分析的解釈（psycho-social や psycho-sexual を含む）を基とした伝記的アプローチが多く、ジャンス・スタウトも、そのなかの1人といえる。以下、スタウトの指標に従い、キャザーと作品の関連を考察する。スタウトは中期の作品を「ダーク・トリオ」（暗い3部作）と名づけ、初期から中期の作品に見られる大きな変化を「断裂」「brokenness」あるいは「分断」「disjuncture」と呼ぶ。スタウトの精緻な読みは伝統的とされるキャザーの作品にモダニティーさえ見出し、直接述べてはいないが、ヘーゲルの総合や進歩的歴史観でなく、不連続、不安定、非整合性を予知させるのである。⁵

オブライエンやスタウト、あるいはジェームズ・ウッドレス、レオン・エデルらの見解を総合すれば以下にあげる4つの要因が初期から中期にいたる大きな変化の説明となるであろう。(1) 第1次世界大戦の影響 (2) 親友／恋人のイザベル・マクラングの結婚でキャザーが受けた衝撃、基盤の喪失。イザベルとその夫ヤン・ハンブルグ（ユダヤ系ヴァイオリニスト）をパリに訪ねたとき、キャザーが味わった失意 (3) 幼児期（10歳）のときの引越しによるトラウマ (4) キャザーの病。

(1) 時代と社会が作者へ及ぼした影響

アメリカは世界大戦の被害を直接本土に蒙ったわけではない。しかしキャザーの愛したヨーロッパ、その愛する土地が戦場と化したこと、参戦した甥の戦死が及ぼした影響、戦争が人間の進歩を奉ずる人々に与えた大きな幻滅は想像出来る。「1920年か、そのころ、世界は二つに分裂した」というキャザーの言葉は研究者によって繰り返し引用される場所であるが、これは二重にも、三重にも解釈されてきた。キャザーの愛した甥の戦死は、作品「教授の家」ではアメリカ人トムの参戦におそらくは反映している。トムは第1次大戦さなかのヨーロッパ戦線に義勇兵として参加し戦死する。ドミニク・ラカプラは「歴史を書く、トラウマを書く」*Writing History, Writing Trauma* において、近年の研究では、トラウマが大きな地位を占め、オブセッションとさえなっており、歴史はすべてトラウマの歴史であり、ホロコースト以降の人間はある意味ではみ

な、生き残りなのだという考えを述べているが、時期こそちがえ、第1次大戦が殺戮による断絶の意識を人々に植え付けたことは考えられないではない。また、戦後景気にわくアメリカ、そこに見られる物質主義の崇拜が、キャザーの断絶意識の背景にあるという解釈もある。これは中期の作品において、古い価値観と新しい価値観の軋みとして表現され、古いものはフォレスト大尉やピーター教授の価値観、生き方、また彼の古い家によって体现され、新しいものは、アイヴィー・ピーターズやルイ・マーセラスの生き方、価値観、また新しい家や新しい都市によって象徴化される。キャザーの生きていた時代は農村人口と都市人口が逆転する時代であり、社会が「ヴァージン」から「ダイナモ」へと、都市化へとおおきく転換する時代であったことも銘記せねばならない。社会の変化、特に経済状況の変化を主たる編集テーマとする雑誌マクルーアに勤務していたことが、彼女の社会にたいする観察力と洞察力を鋭敏化したであろうことは指摘するまでもないであろう。⁶

すなわち、断裂、非連続性がキー・ワードとなっているわけであるが、この意識はキャザーが、「彼女のためだけに作品を書いてきた」と述べる「靈感の泉」イザベル・マクラングの結婚により受けたトラウマ、さらにはキャザーの幼児期の引越しによるトラウマからも説明がなされる。

(2) 人間関係が及ぼした影響

エデル以来、伝記作者が繰り返し指摘する点は、キャザーに部屋を与え、執筆を可能にし、起居をともしたイザベル・マクラング（オブライエンによれば同性愛の相手）がヴァイオリン奏者ヤン・ハンブルグに嫁いだときに受けたキャザーの衝撃、それに伴う根源的基盤の喪失、二人に招かれてパリに渡ったものの、二人の仲むつまじい様子を日々眺めて、彼女が味わった苦い失意、取り残された気持ちである。キャザーはハンブルグ夫妻から部屋を提供され、パリに永住するよう説得されるが、これを拒絶する。このエピソードはキャザーの味わった深い絶望、裏切られたという気持ち、そして愛惜の念が中期の作品の基調音として響いていること、「教授の家」に登場する他者、ユダヤ系アメリカ人ルイが（異論もあるが）批判的に描かれる原因として説明される。⁷

ガストン・バシュラールによれば、精神分析は「出来事に充ちた生」を研究する。「私たちの人生に出来事をもたらすのは他人の生である。平穏な生、出来事のない生に比べるとあらゆる出来事はトラウマとなりかねない」のである。デリダも「パピエ・マシーン」においてド・マンのルソー論を論じたなかで「出来事は予測できないものであるために、そしてあらゆる経験の主体に還元できず、同一化できない外部性をそなえたものであるために、すべての出来事はそもそもトラウマ的なもの」であり「トラウマ的でない出来事など到来しない」と論ずる。デリダによれば、出来事は幸福な事さえ、トラウマをもたらすのである。⁸

(3) ひっこしのトラウマ

これは10歳のとき、家族がレッド・クラウドへ引越をしたときの心の傷が、キャザーの内面に取り去ることの出来ない異物として残っており、それが変化や、新しい環境への激しい拒絶として現れるとする考えかたである。事実、新しい価値観への不適応は「迷える夫人」では大尉の身体の麻痺として比喩化され、「教授の家」では主人公ピーターの新しい家への引越しへの拒絶反応として（主人公ピーターが幼いころの引越しで「死ぬほどの思い」をした）ことが語られている。「場所の現象学」*Place and Placelessness*において、エドワード・レルフはノスタルジアという言葉がスイスの医学生ホーファーによって1678年にはじめて使用されたことを紹介し、当時、この病は患者が故郷に戻れなければ、死にも至るほどの深刻な病だと見なされていたことを指摘する。場所を抜きにして人間存在が論じられないことはレルフが繰り返し主張するテーマであるが、ミルチャ・エリアーデもその著「聖と俗」において人々が聖なる空間を喪失した現代においても、その空間体験のなかに、聖なる空間体験を想起させる、他の場所と質的に異なる場所が存在することを指摘し、そのなかにまず故郷、次に恋人との初めての出会いの場所、最後に初めて訪れた異郷の地を数える。故郷を含めたこれら場所は非宗教的な人にとってさえ独自の意味を有し、その場所は「個人的宇宙の聖地」であるとさえエリアーデは考える。故郷は他の空間とは不連続の、意味に充ちた異質空間、すなわち聖地なのである。「人は死んで母なる大地に帰り、故郷の大地に葬られんことを願う」。¹⁰

下に掲げるのは定住への希求と変化（新しいもの）との関わりにおいて、キャザーの新しいものへの嫌悪がどれほど根深いものであったかを証すものである。

新しいものは常に醜いのです。新しい衣服は常に醜い。プリマドンナは舞台上で新しいガウンを身につけたりしません。（中略）家は、人がそこに長年暮らしていなければ、美しいとは呼べないでしょう。ひどい趣味の家で、家具の趣味もひどくとも、きちんとした家で、きちんとした家具のある新しい家よりも美しいものです。¹¹

(4) 作者の病

オブライエンはキャザーの同性愛、母親との関係などをオブライエン自らのセクシャル・オリエンテーション、支配的な母親との困難な関係などに重ね合わせながら、本来博士論文として執筆し、のち出版されて多大な影響力をもつことになる著書「声の誕生」*Emerging Voice*において、キャザーの芸術家としての自己の確立に至る経緯を論じ、キャザー研究者としての評価を確立する。「病める人々の国の住人、ウイラ・キャザー」“*Willa Cather in the Country of the Ill*”という論文においては、キャザーの患った病を詳しく数え上げ、社会と病、病の作品への反映のありようを論じているのだが、オブライエン自らも、うつ病を患ったことを明かしている。オブライエン

はキャザー研究によって自らの自我を確立し、自己セラピーを行っているのである。病がキャザーの作品におよぼす影響は比較的新しい視点であり、注目されてよい。病が否定的にせよ、肯定的にせよ、新たな知識を病者にもたらし、人を根源的に変えうることは周知のことである。トマス・マンの「魔の山」、ホーソーンの罪と病、漱石の大患などを想起させられ、また心理学者の言う *creative illness* を思い起こさずにはいられない。¹²

中期の作品にみられる暗い色調への変化を「外から」説明するにさいし、そもそもはじめから作者に潜在していたものが、ある出来事を契機として顕在化したにすぎず、まったく新たに生じたものではないと考えることも可能であり、最終的にどの要因が大きく作用したかを問うことはそれなりに興味深い、ある現象をすべて単一の原因に帰し、それによってすべてを説明する傾向は常に単純化の危険を含んでいる。人間の意識が「志向性」を有し、脳が知覚によって得られた情報を常に一定方向に「統合」「単一化」すべく機能し、分裂を不快と感じる構造をもっているとする説を信ずるならば、なおさらのことである。我々を我々たらしめている統合された自己、アイデンティティさえ、脳のなかで日々作られる一連の「物語」にすぎないと考える立場もある。ここでは諸々の要因がその濃淡の差はあれ、連動して作家の心理に影響を及ぼしたと考えたほうがより現実的であろう。「肥料によって花を説明する」と揶揄されるこの伝記的作品理解に限界が伴うのは言うまでもない。デリダが述べるように「文学の内部では全てが秘密なので」ある。¹³

ともあれ、キャザーの作品は、おおよそ、安定への欲求と変化への欲求の競合、変化への抵抗とその超越の試みとのダイナミズムの所産と考えることは出来まいか。芸術は変化を引き起こす時間、すなわち死への抵抗であり、対抗手段である。また、幼児期に体験した引越しのトラウマがイザベルとの離別のトラウマと重なり、病の作用と連結しつつ環境の変化や新たな価値観の出現に対しても抵抗を引き起こす。すなわち、作品のテーマとは川端康成によれば、作者の内面に深く潜んでいるものと環境とがぶつかって立てる音であるという。作者はその衝撃音を読者に届くよう再構築するのである。キャザーの作品を読むことは、いかにしてこの衝撃音が再構築されたかを辿ることだとも言えよう。¹⁴

二つの対立する要素の衝突、せめぎあい「創造的緊張」として機能し、優れた芸術を生み出しうることは論を待たないのであるが、その卓越した、精緻かつ包括的フォークナー論において大橋健三郎氏はフォークナーの小説の根底にあるものを二つの要素の相克、せめぎあいとして捉える。「欧米の前衛的モダニズムへの強い志向」と「作家の生まれ育ったアメリカ深南部の狭い因習的な地域の風土、住民、伝統、風習との強い絆」との相克である。作家の想像力の内部でのその二つの摩擦が「故郷からの脱出願望と故郷への帰属」「外の広い世界への参画の理想とそこでの違和感および内なる世界への帰還の衝動との間の相克」として激しいきしみを引き起こすのであるが、フォークナーは「そのいずれかを選ぶのではなく、その双方を徹底的に見つめ通すという、きわめて困難な道」を選んだのである。その結果、彼の描く世界はアクチュアルな世界をそ

のまま描くのではなく、「それをアポクリファルな世界へと昇華し」、すさまじいばかりの深さを秘めた持続的な力を獲得し、維持するにいたるのである。これを「不可能なものへの逗留」の創造的一例と考えてもよいかもしれない。¹⁵

人間が世界を統合、総合することによってそれを捉えんとする一方、二項対立によって世界を把握しようとする認識構造に支配されていることもよく知られるところである。カール・ポパーはプラトン、ヘーゲル、マルクスを批判的に論じた「開かれた社会とその敵」*Open Society and Its Enemies*に「静止と変化」と題する章〔第4章〕を設け、プラトンの社会変化にたいする考えを解説する。アイデアは永遠であり、完全無欠である。善とは変化しないもの全てであり悪とは分裂し、墮落し、変化するものすべてである。すなわちプラトンは静止が善であり、変化は悪であると説いているのである。ネオ・プラトニックな世界観を持つキャザーにおいても「教授の家」において変化は悪として捉えられ、静止は善と捉えられる。その静止の収斂点が教授の古い家・屋根裏部屋である。屋根裏部屋は静止の絶対空間たらんと努めるのであるが、外の世界は時間が激しく渦まいており、現実界、感覚界においては、変化による腐食作用を受けることは必定である。¹⁶

池澤夏樹は作家が社会の変化のみを扱えばそれは風俗小説となり、変化しないもの、動かしがたいものを中心に据えれば、悲劇の色合いを帯びると指摘し、自らの作品「静かなる大地」における悲劇性に言及する。プラトンにおける静止は絶対的肯定の意味を有する概念であるが、池澤夏樹の言う、変化しないもの、動かしがたいものとは悲劇を特徴づけるギリシャ悲劇の運命的必然である。キャザーにおいて作品が哀歌の色合いを帯びる始めるのは変わらぬものが想像力のなかでのみ可能な隔絶された空間、隔絶された時間、神話的次元のなかになんか存在しなくなるからである。プラトンの絶対世界が、相対世界、現実界に移植されたときの悲劇性がキャザーの描く「教授の家」の世界である。換言すれば、「永遠と変化」“permanence and change”の拮抗、相克が中心テーマとなるのである。¹⁷

急激な社会の変化とそれに伴う変化への反応を、故郷喪失者の体験を語るサイド的視点にまで重ね合わせることがもし可能とすれば、それはサイドが故郷喪失者の味わう喪失感、漂白感、周囲との不調和な感覚、表現行為に伴う不安定感、また過去への復権、肯定、反復などを行っても絶えず疑念とアイロニーに足元を救われることを記した部分、および「過去への帰還はアイロニーを伴うものである。完全な帰還、あるいは帰国は不可能である」と述べた部分に見出しうるのではなからうか。もとより、ある社会に定住しながら社会と個人的環境の急激な変化によって「母国内故郷喪失者」となる人物と、自らの故郷を失い、数カ国を漂白し、現実の漂白者とならざるを得なかった人物とを比較すること自体が無謀にして不当な試みに見えることを承知しながらも、変化がもたらす心理的衝撃、それに伴う方向感の喪失、そして人間の自己定義が周囲から得られる情報によってはじめて可能であるという類似性に筆者はひきつけられるのである。サイドは亡命を余儀なくされたアドルノを範としてアドルノの自伝的著作「ミニマ・モラリア」

から「家はもう過去のものとなった」を引き、アドルノにとって現在、存在する唯一の故郷とは、いかに傷つきやすくとも、著述のなかに存在するのだと言う。この類推をさらに推し進めるなら、キャザーにおいても故郷喪失と存在の基盤の喪失からの回復は、書くという行為そのもの、著作によってのみ可能になったといえるのではなからうか。彼女においても家・故郷はもはや作品の中にしか存在しないのである。¹⁸

以下、本稿ではスタウトが「暗い3部作」と呼ぶ作品群から、「迷える夫人」と「教授の家」をまず比較し、両作品に通底するもの、継続性に主に着目しつつ、イヴ・セジウィックが「難解」かつ「深遠」、ウッドレスが「第一級の達成」、エデルが「伝記研究者にとり、もっとも興味深い作品」、ブラウンが「死に対する深い無意識の覚悟」の物語、ジョアン・アコセラが「深遠」で「ぞっとする」作品と評する「教授の家」について考察する。¹⁹

I

「迷える夫人」と「教授の家」に共通するモチーフのひとつは失意と幻滅、金と所有をめぐる争いである。「教授」の家に見られる失意と幻滅は主に、トムと教授の心理に反映する。過去のメーサにおける文明遺跡の発見は若きトムを興奮させ、友人ロドニーのアドバイスに従い、彼はワシントンに赴き、報告を行い、政府のサポートを得ようとする。ワシントン訪問のさいにトムが経験した宗教的感情の高揚は、ニールがフォレスター夫人をエリンジャーから庇護しようとする気持ちから早朝、バラの花をブーケにして夫人の家を訪れたときの様子と酷似している。

しかし、二人は苦い幻滅を味わう。ニールは崇拝する夫人の姦通を知り、「腐った白百合は雑草より悪臭を放つ」とシェークスピアのソネットの一節をつぶやき、この世で彼がもっとも美しいと思っていたものを失う。成熟の背後には喪失による深い絶望が存在する顕著な例である。一方、トムはワシントンの官僚にとって、過去の遺跡が出世と成功の手段に過ぎず、自分が利用されていることを知り、失意のうちにワシントンを去る。メーサの住人にとっての意味の象徴体系であるコスモス、すなはち、太陽、月、星の運行はワシントンの住人の内面においてはすでに崩壊し、ここは経済法則、政府の方針、官僚の欲望などがうごめく没場所性と脱神聖化の世界である。エリアーデの言葉を借りて言えば、このような社会に「もはや世界は存在しない。あるものは粉々に砕かれた宇宙の断片であり、人々が生活の義務に追われてあちこちに動き回る、無限に多数の、中性的な場所の無定形な集積にすぎない」のだ。²⁰

トムはメーサに帰りつづが、遺跡の発掘物をロドニーがドイツ人に売却したことを知り、(作者のドイツへの態度とフランスへの際立った態度の違いを比較せよ)ロドニーの行為を国への「裏切り」行為と激しくなじる。トムはその若さ、気質、高邁な理想主義故に、ロドニーがいかなる動機からそのような行為に及んだかを考えることが出来ない。彼はロマンチックな理想主義者で

ある。現実には理想の従者たらねばならない。他方、ロディはその育ちからタフな現実主義者とならざるを得ず、金の魔力による支配からは自由ではあるものの、現実界における金の持つ力と有用性を知悉しており、「最後は金だ」[243]と考える。ロディが売却したお金でトムに大学進学をすすめ、「俺のような日雇い労働者になるなよ」[243]と忠告するのはロディの精一杯の思いやりと愛情の表現である。このような気持ちを味わうのが、自分でよかったと言いながら、メーサを後にするロディの思いはどのようなものだったであろうか。ロディにとってトムは唯一無二の友人であり、トムの子期せぬ非難は彼を深くえぐっているのである。信頼というもっとも柔らかな心は藁しべ1本でも刺し貫くことが出来るのだ。

トムはその後、手を尽くして、ロディの行方を探すがロディが姿をあらわすことはない。トムの言葉は深い傷跡としていつまでもロディの内面に残っているであろう。トムのロディに対する愛惜の念は年をおうにつれて深まるが、それは教授や娘たちがロディについて「高貴なロディ」[122]として繰り返し語ることにあらわれている。

セント・ピーター教授も失意と幻滅を味わう。彼が味わう失意はおおまかには、家族、同僚、大学のありかた、社会に起因する。失意はまず妻の変化（彼自身も変化しているが、自分では気づいていない）、妻との心理的距離「他人の心は暗い森である」[93]、娘たちの変化、娘たち夫婦の対立、とくに長女ロザモンドが周囲に見せるとげとげしさと冷酷さ、次女キャサリンの姉への激しい嫉妬、次女の夫スコットがルイに抱く嫉妬と敵意である。教授が学者として認める数少ない大学の同僚クレインも彼の「さえない」妻に扇動され、お金を得るべく、特許をめぐって、ルイとロザモンドを裁判に訴えようとする。大学の教育政策も営利中心であり、金をもたらさない人文領域は狭められる。社会は物質主義が謳歌している。教授の目に映じるものは家の内においても外の世界においてもお金と所有に染まった生き方である。皮肉なことに家族内の軋轢はトムによる発見（原理・理念）とそれを現実化 materialize（応用・内容化）したルイにいきつく。軋轢はほとんどお金、あるいは所有をめぐるものである。

トムが教授の家に姿をあらわしたとき、当初は寛大で親切だった妻リリアンも、ピーターがトムを2階の書斎に連れてゆくようになったとき、トムを嫉妬するようになる。トム自身に罪はないのではあるが、トムをめぐり、教授と妻との間の溝がさらに深まる。トムの死後も、トムの残した発見がルイによって特許化され、すなはち、お金に変換「トランスレイト／チェインジ」されたとき、それは家族、周囲を巻き込み、所有をめぐるねたみ、憎しみの根源的原因を作り出す。

トムをめぐる記憶と所有、それらをめぐる相克がここで作品へのアプローチのひとつを提供する。以下、デリダが喪に服すこと、記憶、悲哀、所有などの概念を用いてフロイトの「悲哀とメランコリー」を論じた部分を手がかりに、人々がトムをいかに記憶化し、所有しようとしたかを見てみよう。

まず、デリダが「雄羊」のなかで論じた喪に服す行為であるが、喪に服すとはいかなる行為であろうか。人の死は絶対的単独性、絶対的他者性をもつその人と、その人の世界の絶対的終焉で

ある。死者を悼む行為はこの絶対的他者性を自己の記憶に所有化することなく、その他者と他者の世界を担うことである。自己の記憶に他者を組み込む内在化の行為はすでに忘却のはじまりである。担うとは「封じこめること、包含することではなくて、まさに私の外なる私の内で、他者の絶対的超越性を迎え入れるために、他者の無限の自己固有化不可能性の方に向かうことなのである」。²¹ デリダは絶対的他者性を尊重しつつ喪に服するという他者を担う行為がメランコリーのなかに人を永遠に留め置くことを知りつつ、悲哀の中に永遠にとどまり続けるという痛みをとめない、ほとんど不可能とも思える行為を要求するのである。

トムをめぐる記憶化と所有化のあり方はどのようになされているであろうか。ここでも一対の対照的な態度が見られる。

トムと私の間に金が介在するなどあり得ぬことだ。そのことについてどう感じているかは簡単には説明できないのだが、お金が絡むと彼の思い出を傷つけ、私の人生のなかでの彼のエピソードを他のありふれたもの同様にしてしまうのだよ。[62-63]

他方、ロザモンドとルイによるトムの記憶化とは制度化であり、所有化である。それはトムの発見の特許化し、トムの名を冠した屋敷を所有し、人々に開放し、奨学金を設けることである。ルイの善意、社会への貢献意識は紛れもない。これも人間を社会化し公的に記憶化するひとつの方法である。しかしこの行為は、より深い実存的次元での人間理解に欠け、人間存在の単独性、独自性への配慮がきわめて平板で一面的である。人間を物質に貼り付け、還元し、所有する制度化の行為といわざるを得ない。トムはなるほど科学者であった。しかし、その前に、彼はまず人間であった。ピーターによるトムの日記編集はこれに対抗する私的な実存的行為である。彼はトムとトムの世界を「担い」続け、メランコリーの状態にとどまることを選ぶ。ピーターはトムを何にも還元しない。日記の編集はトムの死を悼み、トムの世界を担う行為である。

トムのアメリカ的特質と教授のヨーロッパ人的特質の差異、二人の年齢差を別とすれば両者は双生児とも言えるほど精神性と価値観が近接しており、二人の間に際立った絶対的隙間は見出しがたい。トムの死後、戦争から帰ってくるトムの夢を見るピーターにトムへの強い愛惜を見出せるが、最終的に彼のもとに戻ってきたのはトムの分身、子供のころの自分、カンザスの少年であった。トムを悼む愛惜と想起の行為は忘却された自己の記憶を呼び覚ます行為でもあったのだ。我々はここでバシュラールの「夢想の詩学」 *La Poétique de la Reverie* を想起せずにはいられない。バシュラールは夢想という行為が向かう幼年期に格別の意味を見出すからである。

バシュラールは幼年期の夢想の特質として (1) 絶対性と永遠性 (2) 脱時間性 (3) 脱空間性 (4) 脱社会性 (5) 脱歴史性 (6) 美と調和 (7) メランコリーと孤独 (8) 自由 (9) 匂い (10) 老年期の孤独との繋がりを挙げ、論じてゆく。²² 上に掲げた諸々の特徴はピーターの夢想の行く先、あるいはトムの「少年性」をきわめて鮮やかに説明しているように思われる。

バシュラールは幼年期の夢想は絶対的なものであるという。すなはち、それは時間、社会、歴史を超越した永遠の次元を持ち、矛盾や対立が霧消し、美と調和が支配する永遠の王国なのである。

もともと孤独を要する仕事を生業としたピーターではあったが、友人の死、家族内のきしみ、彼がよく肯んじ得ない新たな社会、新たな価値観と生き方の出現によって、彼はますます、その桎梏からの自由、孤独を希求し、古い家の屋根裏部屋にこもるようになる。エデルの言う逃避と安全とを象徴する「子宮」となるのがこの屋根裏部屋なのである。家は物質であるとともに、「場所」であり、「ある精神状況」をあらわす。エドワード・レルフは場所が人間にとって持つ意味を論じ、我々の誰もが黙想できるためのかけがえのないプライベートな場所が必要であること、特に子供にとってはそうした場所は自己を発見するための根拠地となることを指摘し、場所が何か外部とは何か異なるものとして経験され得る「内側」を有しなければならず、それが実存空間における意味の中心を形成すると述べている。すなはち、場所とは人を人たらしめる意味の結節点である。「人は場所であり、場所は人なので」ある。²³

レルフのいう「実存的内側性」を可能とする屋根裏部屋、あるいはトゥアンのいう「親密な場所」に閉じこもったピーターが無意識のうちに向かうのは絶対の孤独と自由とが存在可能な「幼少期の家」であり、「夢想の住まい」である。バシュラールは言う。「夢想する自由のほかにわたしたちにはどんな心的自由がありうるというのであろうか。心理的に言うとなたしたちが自由な存在であるのは夢想の内においてなのである」と。²⁴

バシュラールによれば幼少期の心的美はわたしたちの内部にあり、記憶の底にとどまっているのであり、原初的美は「経験されると永久に有効なものとなる」。「あの美しかった時間、美しかった世界、静謐な世界」はわたしたちの「存在の井戸」となる。「幼少時代を思い出すことの出来ぬ人は不幸である。幼年時代がその人から去ってしまうや、その人は死んでしまっている」のだから。²⁵ ピーターは忘却していた過去に回帰し、そこでのみ味わうことが可能な深い休息と静けさ、美と調和を必要としているのである。

夢想を現実からの逃避として片付けるのは容易であるが、トゥアンが精神分析や人類学の影響を受けながら、「逃避主義」*Escapism* において指摘したように、我々の文化そのものが逃避の産物かもしれないのである。家も、もともと、過酷な自然からの逃避の産物である。トゥアンは、人間を「生まれつき、現実をあるがままに受入れることを厭う動物」と定義し、逃避への欲求は人間に本来のものであり、「逃避」から我々は「逃れ得ない」とさえ述べる。²⁶

ここで再びピーターに戻ろう。戦死したトムの日記を編集するうち、ピーターが幼年期の自己に行き着くのは、幼年期の自己とトムとが深い密度をもって結び合っているからであろう。トムがメーサでの体験を描写した至高の美的・宗教的時間はピーターの内部に幼児期の原初的自己をよびさます種をまく行為でもあったのだ。

ピーターにとって愛、家族は意味をもつのであろうか。ピーターは52歳、(作者と同じ年齢)当時の平均寿命を考慮すれば、人生を振り返り、再考察するにほどよい年齢であるとも言える。ピーターは今まで、自分の人生には2つのロマンスがあったと考える。心のロマンスと知性のロマンスである。前者によって彼が意味するのは妻との恋愛、結婚であり、後者が意味するのは歴史家としての仕事である。ロマンスの色が褪せかけたとき、トムが現れ、教授に第二の青春をもたらす。

ピーターの味わう名状しがたい不満の原因について(1)起こるべくして起きた出来事、すなわち、この年齢層の人間に見られる普遍的現象、中年の危機(2)人生において自己が犯した判断の誤り、自己の責任(3)周囲の変化による、と大別できよう。

教授はどこで道を誤ったかを自己批判的に回顧するうち、自分の人生は自らが選びとったものでなく、偶然が作用し、主体として生きてきた人生ではなかったことに気づく。愛も、家族も、仕事も、彼にはただの偶然の集積であり、彼はそれらにもはや意味を見出せない。愛は過去のものであり、家族にも、所有にも、仕事にも、もはや喜びを見出せない人間にとって、自殺まで行き着くには、あと一歩踏み出すだけでよい。事実、ピーターは、炎の消えた暖房器具から出るガスで、消極的な自殺を計るのである。精神分析では、火は「闘う意志」の象徴であるという。闘う意志が冬の寒風(死)によって吹き消されるのは象徴的である。

作者キャザーにとって、いったい、結婚という社会制度、家族という紐帯は意味を持ち得たのであろうか。ここでキャザーが書いたエッセーが参考になる。ケイト・ショパンによる「目覚め」の書評において、キャザーは愛に全てをかける主人公の生き方を批判し、愛にのみに生きようとする人間には悲劇的な人生しか残されていないという。キャザーはここで「ボバリー夫人」との比較において作品を論じているのであるが、エンマが服毒自殺したように、「目覚め」の主人公は入水自殺する。愛のみに生きることは幻想に生きることに外ならず、結婚しても、破綻に瀕することは必然であり、家族の間にさえ生まれる心理的距離は当然の帰結である。51年という歳月を、愛する人のためひたすら待ち続ける主人公を描くマルケスの「コレラの時代の愛」とは何という違いであろう。しかしキャザーは情熱が持つ破壊性とその幻滅を知り尽くしているのである。

キャザーにとって、人間関係は悲劇的必然であるらしい。レヴィ＝ストロースは社会と家族を対峙させ、社会が必要悪の側面をもつことを認めるが、人間の本質と見なされる関係性、他者は必然的に地獄なのであろうか。人間が真に人間たり得る場所は社会から隔絶された自然という空間、あるいは輝かしい過去、あるいはユートピアという未来の次元にしか残されていないのであろうか。

以下、キャサリン・マンスフィールドについてキャザーが論じたエッセーのなかからキャザーが家族と人間関係について述べた一節を引用する。

人間関係が円滑な家族においてさえ、二重の人生が存在する。わたしたちが隣人の家庭に見出す一集団としての人生と、その下にあるもうひとつの人生、すなわち、隠された、激しい、情熱的な人生とである。(中略)心のなかで、これら社会の中の住人は、常に、逃げ去り、逃避し、環境と自らの愛情が紡ぎだした網を破ろうと試みる。そのとき人は人間関係が人生の悲劇的必然であることに気づくのだ。人間関係が決して満足いくものになり得ぬことに、すべての自己は、一方では人間関係を貪欲に求めつつ、他方ではそこから身を引き離そうとすることに気づくのだ。²⁷

Notes

1. Janis P. Stout, *Willa Cather: The Writer and Her World* (Charlottesville and London: University of Virginia Press, 2000) pp. 192, 214.
2. Frederic Jameson, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act* (New York: Cornell University Press, 1981) See Chapter 1.
3. Susan Sontag, *Against Interpretation* (New York: Dell Publishing Company, 1961), p. 8. S. フロイト「不気味なもの」フロイト全集第17巻 須藤訓任編所収(岩波書店 2006年) ヴィクトル・シクロフスキー「散文の理論」水野忠夫訳(せりか書房 1971年)
4. Edward Said, *Reflections on Exile and Other Essays* (Cambridge: Harvard University Press, 2000); Sharon O'Brien, *The Emerging Voice* (Oxford: Oxford University Press, 1987)
5. Stout, Preface.
6. Janis P. Stout, "Autobiography as Journey in The Professor's House," *Studies in American Fiction* 19 (1991), pp. 203-15. O'Brien, "Willa Cather in the Country of the Ill" in *Cambridge Companion to Willa Cather* edited by Malilee Lindemann (Cambridge University Press, 2005) pp. 146-156. James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (The University of Nebraska Press, 1987) Leon Edel, *The Stuff of Dreams* (1982), pp. 219-40.
7. Diminick LaCapra, *Writing History, Writing Trauma* (Johns Hopkins University Press, 2000), Preface x.
8. Stout, "Autobiography as Journey in the *The Professor's House*"
9. ガストン・バシュユール「夢想の詩学」岩村行雄訳(筑摩学芸文庫 2002年) p. 216. ジャック・デリダ「パピエ・マシーン」上 中山元訳(筑摩学芸文庫 2005年) p. 262.
10. エドワード・レルフ「場所の現象学」高野岳彦・阿部隆・石山也子訳(筑摩学芸文庫 1999) p. 110. Edward Relph, *Place and Placelessness* (Pion Limited, 1999) ミルチャ・エリアーデ「聖と俗」風間敏夫訳(法政大学出版社 1969年) pp. 16, 133. Milcea Eliade, *Das Heilige und das Profane, Vom Wesen des Religiösen* (Rowolht, Hamburg, 1957)
11. Willa Cather, *Interviews, Speeches and Letters* edited by L Brent Bohlke (Lincoln: University of Nebraska Press, 1986), p. 46.
12. O'Brien in Lindeman ed. pp.146-156.
13. デリダ「パピエ・マシーン」下 p. 386.
14. 川端康成、「小説の研究」(講談社学術文庫 1983年) p.
15. 大橋健三郎「フォークナー：アメリカ文学、現代の神話」(中公新書、1993年) vi, vii.
16. カール・ポパー「開かれた社会とその敵」第1巻 内田昭夫・小河原誠訳(未来社) pp. 53-70. Karl R. Popper, *The Open Society and Its Enemies* (Princeton University Press, 1950) Part I Chapter 4.
17. 池澤夏樹「世界文学を読みほどく：スタンダールからピンチョンまで」(新潮選書 2005年) p. 31.
18. Edward Said, *Reflections on Exile and Others Essays* (Cambridge: Harvard University Press, 2000), pp. 33-34. テオドール・アドルノ「ミニマ・モラリア」三光長治訳(法政大学出版局 1979年) p. 190.
19. Eve Sedgwick, "Across Gender, Across Sexuality: Willa Cather and Others," *South Atlantic Quarterly* 88.1 (Winter 1989), pp. 53-72. James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (The University of Nebraska Press, 1987), p. 371. E. K

- Brown and Leon Edel, *Willa Cather: A Critical Biography* (New York: Knopf, 1953) pp. 237-247. Leon Edel, *The Stuff of Dreams* (1982), pp. 219-40. Joan Acocella, "Cather and the Academy," *New Yorker* 27 (November 1995), pp. 56-71.
20. エリアーデ「聖と俗」p. 15.
 21. ジャック・デリダ「雄羊」林好雄訳(ちくま学芸文庫2003年)p. 83.
 22. ガストン・バシュラール「夢想の詩学」及川かおる訳(ちくま学芸文庫2004年)3章 幼少時代へ向かう夢想参照。
 23. レルフ pp. 21, 49, 64.
 24. Yi-Fu-Tuan, *Space and Place: The Perspective of Experience* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1977) pp. 137-138, 140, 147. バシュラール「夢想の詩学」p. 166.
 25. バシュラール p. 196.
 26. Yi-Fu-Tuan, *Escapism* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1998) Preface. xvi.
 27. Willa Cather, *Willa Cather on Writing: Critical Essays on Writing as an Art* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1988), p. 109.